



東北復興 MHSW にゆうす

各地で地震が相次いでいます。ご自身やご家族、お勤め先での備えはいかがでしょうか。
本委員会は、コロナ禍による感染対策のため引き続きオンラインで実施し、活動の在り方を模索しております。
今後の活動やこれまでの取り組みの検証の状況について、順次お知らせしていきますのでどうぞよろしくお願いいたします。
(東日本大震災復興支援委員会一同)

「平時のつながりは災害時に活かされ、災害後のつながりは平時の支えにもなる」

東日本大震災復興支援委員会
委員長 菅野 直樹 (福島県支部)

東日本大震災から10年半の月日が経過しました。

同大震災が世界中に与えたインパクトは未だ記憶に新しいものです。しかし、当時、確かに在った切迫感や危機感、言葉で表現できないような感情は、時間の経過と共に薄らいでいることを私は実感しています。恐らく、それは自分自身の助け方、心身のバランスの取り方、環境への適応と表現できるもので、私自身が必要、もしくは潜在的にも必要とせざるを得なかったのかも知れません。一方で、当時とはまた質の異なる感情を有している自分が存在していることも確かです。十年一昔と言いますが、世の中の移ろいも激しく、歳月の流れの速さを感じています。被災やそれから蓄積された取り組み、それが例えば微々たることでも遺していくことについて、ある方は「今後の災害で役立てられるように遺していくことは大切。その作業はしんどいけど、経験した人しかできないし、それが今後の備えになること。それが“被災地責任”と言えるのだと思う」と語られていたことがありました。当時は耳が痛いものでしたが、厳しくも核心に迫る言葉だと、今でこそ受け止めています。

では、私は、そして、私たちは、どんなことを遺していきたいのでしょうか。

端的に述べるのは、本当に難しいのですが、私が遺したいのは「災害は平時の延長にある」という考えでしょうか。災害という切り出し方をすると特別なような気がしますが、それが『災害支援』になると、特別なもの、自分以外の誰かが行うもの、という感覚を持ちやすくなるように思います。ですが、被災後に顕在化するのには平時に於ける課題です。それはプライベートなものであり、職場のことでもあって、そして地域の課題であると言えます。そのように考えると、日頃の取り組みが充実していれば、むしろ、充実させることが災害支援の一環であるというように思います。もう一つ、些細な実践ながらも災害支援に携わった場合は、そのことも是非なんらかの形に遺せると良いのではないかと、思えます。特に勉強会や研修会などに加え、学会報告のような形に遺せたりすると、“その時”にアクセスしやすくなり、“現在”必要な人に必要な情報や実践が届くための目印になると思います。そのような経過から私も試行錯誤してきたわけですが、ある日、定期的に福島へ足を運んでくださっていた方から「災害支援は普段の支援と共通するものがあるんじゃない?」「それを普遍化していくことって大切だと思う」と言われたことがあります。確かにその通りで、それ以降、『普遍化作業』についても意識するようになりました。

私が普遍化を試みた中で、最も心に留めたいと思うのは、“つながり”です。それは言葉を変えると多職種連携と言えるでしょうか。その重要性は、昨今、あらゆる場面で謳われます。東日本大震災後、「交流しているから連携ってできるんだよね」「顔の見える関係だけではなく、顔の『向こう側』が見える関係が大切だね」という言葉に出会いました。きっかけは“縁”です。縁がつながり交流が生まれ、交流を続けることで顔の向こう側が見える関係に発展します。すなわち、つながりは“縁”によって生まれ、育まれると言っても過言ではないような気がするのです。

東日本大震災復興支援委員会では、長らく“縁”を大事にしてきました。例えば、現地との交流するツールとして復興支“縁”ツアーを開催したり、コロナ禍後は『オンライン交流会』として形を変えて実施をしたりしてきました。詰まるところ、平時のつながりは災害時に活かされることになるし、災害後のつながりが平時の支えにもなる、ということをお私達は肌身で感じてきたと言えます。そのような折、実は、“縁”と“つながり”を実感できる機会になることを願い、コロナ禍ですので、第2弾となるオンライン交流会を今年度末にも実施したいと考えています。詳細は次号以降になりますが、皆さま、万障お繰り合わせのうえ、ご予定いただければ心から嬉しく思います。

限られた紙面ではありますが、この場をお借りして、個人の想いや考え、そして当委員会が大事にしてきたことなどの回顧を試みました。こうした形で全国の構成員の皆さまと“縁”と“つながり”の機会を得ていることにも心から感謝しております。また、最後までご覧いただき、ありがとうございました。皆さまに於かれては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

☆物販のご報告☆御礼☆

先の全国大会（北海道札幌市）は、協会初となるオンラインでの開催でしたが、全国から 1000 名を超える構成員の皆さまが参加され、現地運営委員の皆さまのご尽力により盛会のうちに幕を閉じました。

当委員会ではこれまで全国大会の開催に合わせて「東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業」として全国大会の会場に販売ブースを設け、製品販売を通じて参加される構成員の皆さまに被災地の現状をお伝えする活動を続けてきました。しかし、今年度は現地での販売がかなわないため従来とは趣向を変え、全国大会ウェブサイトにて事業所のリンクを掲載することにより被災地事業所の販売促進につなげる活動を行いました。全国大会で構成員の皆さまと直接対面して交流しながら製品販売をすることができなかったのは大変残念でしたが、全国大会ウェブサイトの事業所リンクは現在もご覧いただけますのでより多くの皆さまが被災地事業所の現状に思いを馳せる機会になれば幸いです。

[2021 年度東日本大震災・被災地障害者作業所等製品販売事業のご案内]

☞ https://www.jamhsw.or.jp/taikai/2021/recovery_support.html

検証作業進捗報告

私たちは現在、委員会活動の「検証」と「将来への備え」の意味を込めて、活動報告集の制作を進めております。そのために東日本大震災時の協会災害対策本部、復興支援本部、復興支援委員会の活動に携わってこられた 40 名以上の構成員と事業所の方々に原稿執筆を依頼させていただきました。当時の克明な様子や思いが綴られた内容は、あまりにも尊く貴重で、それ自体が明日の備えになります。年度内に皆さまにお届けできるよう委員会一丸となって編集作業頑張ります…！

メッセージのご紹介

～東北復興 MHSW にゅうす第 54 号にてご寄稿いただきました、宮城県支部 小野正生支部長（東日本大震災復興支援オンライン交流会シンポジスト）の記事に、感想とメッセージをお寄せいただきましたのでご紹介いたします。～



小野さんのメッセージで印象に残ったことは3つあります。

- ・区切りをつけたいのは誰なのだろう
- ・何よりオーバーワークになっていた
- ・どんな状況でも対応できるような人間関係を構築していることです。

「いま忙しいから」ではなく、「どうしたの?」と平素から声を掛け合える人間関係であることが重要



自然災害を目のあたりにすることが増えたと思います。ご経験された方々、おひとりお一人にエピソードがある。それをかみしめました。どんな状況においても、オーバーワークは自身の健康を悪くするだけでなく、周囲への影響も少なくないと思います。身を削る思いがあっても、身を削ってまでできることはないと感じさせられました。

日頃の立ち振る舞いがどれだけ大切なことか、日頃があって、有事の際に己の力を発揮することに繋がると感じました。あれから…と時間経過に片づけるのではなく、ひとつひとつにしっかりと向き合いたいと思いました。

小野さんのメッセージ、ありがとうございました。（構成員：小澤 朋子）

ご感想・メッセージをお寄せいただき誠にありがとうございました！委員一同

【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会ウェブサイトにてご紹介させていただきます（原則として投稿者氏名以外の個人情報掲載いたしません）。投稿方法は FAX もしくは E-mail: office@jamhsw.or.jp にてお願いいたします。

★題名に「MHSW にゅうすについて」とご記入をお願いいたします。★

第 55 号 2021 年 11 月 15 日発行

編集：公益社団法人日本精神保健福祉士協会 東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町 23-3 四谷オーキッドビル 7F TEL. 03-5366-3152 FAX. 03-5366-2993

★URL：<https://www.jamhsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>